

Title	川合貞一先生略年譜並著作目録
Sub Title	
Author	阿部, 隆一
Publisher	三田哲學會
Publication year	1956
Jtitle	哲學 No.32 (1956. 3) ,p.5- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000032-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

川合貞一先生略年譜並著作目録

阿 部 隆 一 稿

明治三年（一歳）

三月二十九日 岐阜県安八郡川並村大字平八十一番戸（現大垣市に編入）に、川合源十郎、母せいの長男として誕生。先生号は無絃、俳名は文軌。川合家世々農を営み、文雅を好む。先考源十郎氏は俳名を旭楳園文花と号し、夙に美濃派の宗匠として令名高し。門弟蕭

々園湘潭曰く、「先師は独り俳道のみにあらて広く公共の為に尽されし事も少なからず嘗ては県会議員に選はれ官選戸長を拝命し町村制施行の後村長に推され又鵜森水理組合委員に挙げられて上京し請願の事に奔走し克く其任を全うせられぬ明治三十八年十月獅子門道

明治十九年（十七）

年秋北越を巡錫して斯道を鼓吹せられ後進を誘掖せられぬ」（文花師一周忌追善句集「淡雪の痕」跋文）と。先生幼時、先考より素読を授かる。大垣の興文小学校を卒業し、中学校に学ぶ。傍ら旧藩儒一柳芳州並に藤円曉の門に漢学を修む。

妹ふさの氏誕生。中学在学中チフスに罹り、進級の遅れることを厭ひ、退学して東京に遊学せんことを志す。十一月 慶應義塾に入学。

明治廿三年（廿一）

一月 塾に大学部創立され、同部文学科に進む。

明治廿五年（廿三）

十二月 文学科を卒業す。

明治廿八年（廿六）

三月 文部省英語科試験に合格。

四月 新潟尋常師範学校嘱託となり、九月教諭に任せらる。

先生新潟時代の一年半を回顧され、月給廿五円一流旅館に泊し、毎晩三の膳つき、月末女将菓子折をもつて挨拶に来る、正に我が生涯の黄金時代なりとよく笑草になし給ふ。当時の受業者中に東洋史学者稻葉君山博士等あり。

明治廿九年（廿七）

十二月 母校慶應義塾に帰り、西洋史の教授となりて舍監を兼ね。舍生に松永安左衛門氏等あり。

明治卅年（廿八）

九月 舍監の兼職を辞し、論理学、心理学の専任教授となる。

明治卅一年（廿九）

明治卅二年（卅）

九月 慶應義塾大学部文学科教務係（主任）を嘱託さる。

三・四号)

七月 慶應義塾第一回留学生に選ばれ、哲学、教育及び心理学研究のため渡欧。イエナ大学に於て、哲学をオイケン、リープマンに、教育学をラインに、心理学をチーエンに就きて聴講。

四月 従来の慶應義塾大学部の法文科の三科を廃し、理財科のみとし、単に慶應義塾大学部と称することに決す。

明治卅三年（卅一）

五月 慶應義塾文学科自然消滅。

明治卅四年（卅二）

ライブツヒ大学に移る。ヴァントを始め、フォルケル

原ふさよ女と結婚。

四月 西欧批評の歴史的観察（「慶應義塾学報」二・

ト、ハインツの講筵に列す。特にヴァント教授に傾倒する。

れ、従来の学科の外、倫理、社会学を担当する。
年により、一時認識論、美学、独文学をも講ぜられしことあり。

明治卅五年（卅三）

ヴァント教授の心理学研究教室に客員ボスピタンとして入ることを日本人として、始めて許さる。

明治卅六年（卅四）

三月 帰朝。四月以降、哲学、教育学、心理学及び論理学を講ず。

六月 ヨビノーと其人種論（「慶應義塾學報」六六号）

七月 社会に於ける教育の水準（「慶應義塾學報」六七号）

明治卅七年（卅五）

長男逸郎誕生。

一月 スペンサーの哲学（「慶應義塾學報」七三号）

明治卅八年（卅六）

夫人病死さる。

五月 慶應義塾大學部文学科再興され、科長に任せら

明治卅九年（卅七）

三月廿日 慶應義塾普通部主任を兼任。

二月 戦後の教育（一）（「慶應義塾學報」百号）

明治四〇年（卅八）

渡部かん女と結婚。

三月十六日 先考源十郎氏郷里にて逝去さる。行年七
歳。

九月 新論理学綱要（慶應義塾出版局発行、菊判、二
〇四頁）

明治四一年（卅九）

三月 長女文誕生。

先考一周忌に際し帰郷、追善の俳筵を開かる。その句

集並に全国より寄せられたる追悼の句を編し、八月、

「淡雪の痕」一冊を刊行さる。

九月 〔増訂新論理学綱要〕二版。

明治四二年（四〇）

潛在意識に就て（「三田学会雑誌」一卷一号）

人世の意義及び価値——ルードルフ・オイケンの新人

生観——（一・一）（「三田学会雑誌」二卷二号、三号）

明治四三年（四一）

十一月 次男貞郎誕生。

人世の意義及び価値——ルードルフ・オイケンの新人

生観——（三・一五）（「三田学会雑誌」三卷一号、四号、

四卷一号）

明治四四年（四二）

春三田哲学会再興され、会長に推さる。

倫理学者としてのアダム、スミス（「三田学会雑誌」五

卷三号）

明治四五年（四三）

五月 個人主義と団体主義（「慶應義塾學報」一七八号）

六月 哲学の運命（「慶應義塾字報」一七九号）

大正二年（四四）

七月 科学と哲学（「慶應義塾學報」一九二号）

九月 ベルクソン哲学の根本思想（「慶應義塾學報」一

人生と哲学（慶應義塾出版局発行「東京市慶應義塾講

演集」所収、四月講演の筆記）

大正三年（四五）

一月 三男賢郎誕生。

二月 哲学と教育（慶應義塾出版局発行「慶應義塾大阪講

演」所収、前年八月講演の筆記）

ベルクソンから（一一七）（「三田文学」六月号——十二

月号、「直ちに意識に与へられたるもの」の抄訳に

して、小林澄兄氏訳に加筆されたるもの）

大正四年（四六）

ベルクソンから（八）（「三田文学」一月号）

文明とは何ぞや（「三田評論」三月号）

大正五年（四七）

二月 四男豊郎誕生。

想」と題し、先生の思想の中核をなす恩の思想につき
発表さる。

大正九年（五一）

戦争哲学（「日本及日本人」一月一日号〔六四六号〕）

三月 新大学令による慶應義塾大学文学部教授となり

新国家思想の先駆者（「三田文学」五月号）

学部長を兼ね。

歴史哲学の問題（「三田文学」六月号）

恩の思想（「三田評論」二月・三月号）

大正六年（四八）

三月 民族性と教育（慶應義塾出版局発行「慶應義塾

大正十年（五一）

十月 歴史に対する近代の認識論的考察（一）（「史学」

和歌山講演」所収、前年八月講演の筆記）

一卷一号）

十一月 勇氣（「普通部会誌」十号）

大正十一年（五二）

大正七年（四九）

一月 歴史に対する近代の認識論的考察（二）（「史学」

教育の今昔（「三田評論」一月号）

二卷一号）

大正八年（五〇）

四月 流行哲学（「三田文学」四月号）

五月 共同責務の思想（三田文学会編「三田文選」所

九月 哲学に於ける二つの途（「三田文学」九月号）

収）

九月 現代哲学への途（東京 東光閣書店発行 四六

判四二八頁）内容目次――一、哲学の運命 二、科

十一月 三田演説会第五二六回講演に於て、「恩の思

学と哲学 三、直觀哲学の弱点 四、流行哲学

五、歴史哲学の問題 六、歴史に対する近代の認識

論的考察 七、ルードルフ・オイケンの新人生觀

「学会雑誌」十七巻七号アダム・スミス生誕二百
年記念号)

八、戦争哲学 九、歐州戦争と思想 十、共同責務
の思想 十一、恩の思想 十二、再び恩の思想に就
て 十三、宗教の進化 十四、潜在意識に就て 十

九月 再び文化の問題に就いて(「三田評論」九月号)

大正十三年(五四)

五、スペンサーの哲学

五月 カントと現代の哲学(「三田文学」五月号カント
記念号)

十一月 哲学から教育へ(東京 東光閣書店発行 四

十月 ホイスナー著西谷謙堂訳「ザントの哲学と心理
学」の序文。

六判三三二頁) 内容目次一一一、哲学と教育 二、
文明及び文化 三、文化の問題 四、民族性と教育

五、群衆の心理と教育 六、教育の今昔 七、個人
主義と团体主義 八、国家に対する現代思想の傾向

四六判二八二頁) 内容目次一一一、カントと現
代の哲学 二、「限界概念としての意識一般 三、

九、軍国主義と産業主義 十、新國家思想の先駆者

大正十二年(五四)

哲学に於ける二つの途

九月 普通部主任を辞し、大学予科主任を兼任。

大正十四年(五六)

五月 普選と教育(「三田評論」五月号)

六月 現代哲学の趨勢(慶應義塾大学編、東京 岩波
書店発行「現代思潮講演集」所収、前年八月慶

七月 アダム・スミスの「道徳情操論」に就て(「三田

応義塾大講堂に於ける講演筆録)

十一月 思想の力 (「成人」三卷三号)

ヘルデル 歴史哲学下 (東京 国民図書株式会社発行)

十一月 *Psychologische Methoden* (「哲学」第三輯)

泰四 歴史叢書十四巻 上巻田中萃一郎訳 田中博士
名著

昭和三年 (五九)

急逝の為め、下巻の訳を依頼され、橋本孝氏の訳に

三月 慶應義塾大学文学部に提出せる学位論文「歴史

先生加筆訂正の上、刊行さる)

哲学研究」により文学博士の学位を受く。

十月 理想と現実 (「三田評論」十月号)

二月 明治維新を回顧して昭和の維新に及ぶ (「三田評

大正十五年 (五七)

九月 我が民族性の弱点に就て (「三田評論」九月号)

四月 政治に対する無関心 (「三田評論」四月号)

十月 *Transzendentale Methode* (「哲学」第一輯)

五月 新論理学綱要改訂増補十三版 (東京 慶應義塾大

十一月 確信に就いて (「三田評論」十一月号)

六月 学出版局発行、菊判三十六頁)

十二月 理想と現実——ラジオ講演の原稿を以て論文
に換へる—— (「予科会誌」一号)

五月 ランゲ唯物論史 (上) (東京 丸善株式会社
発行 西谷謙堂氏等の訳に先生加筆訂正を加へ
刊行)

昭和二年 (五八)

四月—六月 哲学の話 (「成人」二卷八—十号)

六月 唯物的人生観 (「三田評論」六月号)

六月 心情の涵養 (「三田評論」六月号)

九月 思想問題に就いて (「三田評論」九月号)

けちな考を持つな (「予科会誌」二号)

十一月 思想対策如何 (「三田評論」十一月号)

九月 教育に於ける人格的要素 (「三田評論」九月号)

十二月 学説の一面性 (「成人」三卷十六号)

昭和四年（六〇）

一月 福沢先生の人生観（「三田評論」一月号）

二月 現代思想の淵源（「三田評論」二月号）

七月 福沢先生の思想原理（「予科会誌」六号）

八月 ランゲ 唯物論史（中）（東京 丸善株式会社
発行）

九月 国家に対する謬想（「三田評論」九月号）

十一月 唯物的人生観（「成人」四卷十一号）

機械文明に就いて（「三田評論」十一月号）

現実生活の豊富（「予科会誌」七号）

昭和五年（六一）

一月 論理学（東京 春秋社発行「大思想エンサイク
ロペシア」第一卷哲学所収）

三月 倫理学に於ける Sollen の問題（「哲学」第六
輯）

四月 世界観人生観（「三田評論」四月号）

五月 道徳の起原（「成人」五卷九号）

昭和六年（六二）

七月 文部省の思想問題調査委員に推举さる。

十二月 慶應義塾大学同僚門弟等、先生の還暦祝賀の
意を表し、「川合教授還暦記念論文集」（菊判、八二二
頁）を刊行し、先生に献呈す。

一月 沢木四方吉君を憶ふ（「三田文学」一月号）

二月 我が中等教育に就いて（「三田評論」二月号）

三月 近代人生観の種々相とその批判（思想問題研究
会編 東京 社会教育会発行「欧米社会思想と
その批判」所収）

四月 唯物弁証法に就て（「三田評論」四月号）

六月 現下の世相を直視して（「成人」六卷六号）
ミルの「功利論」の書き入れより見たる福沢先
生（「三田評論」六月号）

九月 思想問題対策の問題（「三田評論」九月号）

十月 我が初等教育に就いて（「三田評論」十月号）

十一月 社会の先導者たれ（「予科会誌」八号）

昭和七年（六三）

五月 独逸政府よりローテン・クロイツ勲章を贈ら

る。

八月 文部省「国民精神文化研究所」設立され、研究

嘱託を委任さる。

二月 思想善導に就て（「三田評論」二月号）

三月 河村博士を悼む（「原理日本」八巻二号河村幹雄

氏追悼号）

マルキシズムの哲学的批判（東京 青年教育普

及会発行 四六判二三八頁）

四月 「福沢諭吉伝」を読んで（「三田評論」四月号）

五月 ヘルデル著歴史哲学 東京 第一書房より重印

さる。

ランゲ 唯物論史（下）（東京 丸善株式会社發

行 卷末「マルキシズムの批判」を附す）

六月 因果論（東京 岩波書店發行 岩波講座哲学の

中、菊判四〇頁）

川合貞一先生略年譜並著作目録

七月 「田中萃一郎博士」略歴（三田史学会編「田中

萃一郎史学論文集」所収）

唯物史観に就て（「三田評論」七月号）

十一月 社会と個人（「三田評論」十一月号）

十二月 一面的社会観を排す附現代思想の批判（東京

青年教育普及会発行 四六判四七頁）

昭和八年（六四）

六月 社会思想に関する文献（「国民精神文化研究所々

報」一号）

八月 林毅陸氏「弘堂講話集」（「三田評論」八月号）

十月 唯物史観に就て（「国民精神文化研究所々報」二

号）

十二月 啓蒙思想と現代思想（「三田評論」十二月号）

青年の元氣（「予科会誌」十四号）

昭和九年（六五）

三月 鎌田先生の追憶（「三田評論」三月号）

六月 現代社会思想の動向（「三田評論」六月号）

十一月 福沢先生の教育観（「史学」）

号）

福沢先生の学徒に期待されしもの（「予科会誌」十五号）

昭和十二年（六八）

二月 長男逸郎氏不慮の災により逝去。

昭和十年（六六）

四月 慶應義塾学事顧問にあげらる。

三月 日本精神と社会の本質構造との関係に関する研究序説（「国民精神文化研究」第二年第七冊

B5判 五六頁）

理想と現実（「国民精神文化講演集」第二冊）

九月 個人主義より全体主義へ（「国民精神文化」一巻二号）

五年第七冊 B5判六七頁）

十月 恩（東京 国民精神文化研究所発行「国民精神文化類輯」第九輯 B6判 六〇頁）

昭和十一年（六七）

一月 文学部入学志望者の為に（「三田評論」一月号）

十周年記念号発刊に際して（「予科会誌」十六号）

九月 ファシズムの根本思想（「国民精神文化」二巻二

四月 ^改新論理学綱要（東京 慶應義塾出版局発行

三月四日 母堂せい氏逝去さる。

昭和十四年（七〇）

福岡講演筆記）

六月 E・シュープランガー教授（「三田評論」六月号）

十一月 我が国体の基礎（「国民精神文化」三巻三号）

昭和十三年（六九）

三月卅一日 慶應義塾大学文学部長予科主任を辞任。

三月 明治文化の精神的底流（「国民精神文化研究」第一

五年第七冊 B5判六七頁）

近代社会思想の動向（「国民精神文化」三巻四号）

五一六月 現代思想の動向（「三田評論」五・六月号、

福岡講演筆記）

B6判 三〇九頁)

昭和十七年(七三)

六月 神戸寅次郎君の追憶(「三田評論」六月号)

昭和十五年(七一)

七月 先生の古稀を祝し、「哲学」第廿一・二輯を「川合博士古稀記念特輯」として刊行、先生に献呈す。

一月 史学者田中君(「三田評論」一月号)

五月 八紘一宇の理念(「国民精神文化」五月号)

六月 大学創立五十年(「三田評論」六月号)

十二月 ^{慶應}_{義塾}福沢先生研究会編「福沢諭吉の人と思想」

(東京岩波書店発行)に、先生序文を寄せ、「福沢先生の教育観」を同書に再収す。

昭和十六年(七二)

七月 福沢諭吉先生を語る(東京 日黒書店発行 東洋文化叢書2 B6判一〇一頁)内容目次――

福沢諭吉先生を語る、福沢先生の思想原理、ミルの「功利論」の書き入れより見たる福沢先生、福沢先生の人生観。

川合貞一先生略年譜並著作目録

慶應義塾以外に関係せる、国民精神文化研究所嘱託、

智山専門学校講師(就任年不明)文部省の諸学振興委員、その他の諸委員(いずれも就任年月不明)等を一切

この頃辞任さる。(辞任の年月不明の為め、茲に繋ぐ)
一月 思惟の二つの方向(「国民精神文化」一月号)

昭和十八年(七四)

七月 慶應義塾大学亞細亞研究所顧問に推さる。

九月十三日 「恩の思想」の業績により、慶應義塾学事振興資金による第一回表彰を受く。

十二月三十一日 慶應義塾を退職。

五月 皇國世界政策の倫理的基礎(「原理日本」十九卷

五号)

六月 ヴント先生の思ひ出(「原理日本」十九卷六号)

九月 恩の思想(東京 東京堂発行 A5判 四一八頁)内容目次――第一篇思想 一、恩の思想 二、日本精神と社会の本質構造との関係 三、八紘一宇

の理念 四、具象的思惟と抽象的思惟 第二篇歴史

発行 昭和七年刊の改訂版 B6判 二三六頁)

一、歴史観 二、明治文化の精神的底流 第三篇国

十一月 ランゲ著唯物論史（上）東京 実業之日本社

家 一、理論と現実 二、国家観 結語

より重刊

昭和十九年（七五）

一月一日 慶應義塾大学名誉教授の称号を受く。

一月 慶應義塾関係有志相より、謝恩会を帝国ホテル

に催す。

三月 藏書の大部分を慶應義塾大学哲学研究室に譲渡す。
四月 大垣市外川並村の郷里の自宅に疎開。

七月 国家と教育（日本教育学会編 東京 新紀元社
刊「教育学論集第三輯」所収、前年四月三日慶
應義塾に於ける同学会第三回研究発表会に於け
る講演〔代読〕筆記）

昭和廿三年（七九）

十一月 次男群馬大学医学部教授貞郎氏宅に移転。

三月 マルクシズムの哲学的批判（京都 丁字屋書店

昭和廿四年（八〇）

三月 唯物論史（中）実業之日本社より重刊

昭和廿六年（八三）

十一月 東京都世田谷区奥沢の自宅売却につき上京さ
る。聯合三田会等に出席、塾文学部有志歓迎会
を催す。先生最後の塾訪問となる。

昭和廿七年（八三）

七月 ギリシャより現代に至る西洋倫理思想史を概述
せる「道徳的世界觀とその変遷」をほぼ脱稿さ
る（七月七日附序文。本文二百字詰原稿用紙約
七七一枚。未刊）

昭和廿八年（八四）

九月 ヴィルヘルム・ヴァント（日本応用心理学会編
東京中山書店発行「心理学講座」七回配本「人

物評伝」所収)

昭和卅年（八六）

名古屋女子短期大学々長に就任。秋同大学に於て、倫理学の連続講筵を開く予定を立てられ、ノートの作成に精励さる。平素の如く、細字周密に書き列ね、表紙に「実践哲学—倫理学講本卷一」と題さる。未完に終る。

六月十六日 降り続きし霖雨午後より霽る、先生久しふり散歩をこころみ、夕食後六時頃縁側にて休息中、卒中発作にて急に倒れらる。十七日午前中はやや意識を保たれ、話しかけに対し微かに応答の表情を示し給へど、午後より意識不明。十八日同様。

十九日午後七時廿五分 主治医の診察終り、間もなく何らの苦痛もなく静に永眠さる。

廿日 遺言により、群馬大学医学部に於て解剖。内臓の清浄青年の如く、立ち会へる医員平素の養生節制の効に驚嘆すと云ふ。

廿一日午後二時 自宅に於て仏式により告別式。
法名「学解院积貞導不退位」

十月十九日 東京都小平靈園に川合家墓所成り、納骨式を當む。同日夜御遺族を招待し、塾文学部主催による追悼会を三田三井俱楽部に催す。

附記 先生は求められれば別であるが、御自分の過去について、自ら語られることはなかつた。著書や発表された雑誌論文の類も、身辺に保存しておかうといふ御気持

は毛頭お持ちにならなかつた。人にやるか、たまれば屑物屋に平氣で払つてしまはれた。先生の講義のノートはかなりの教量に上り、いづれも貴重な未発表のもので、それをまとめて刊行して頂きたいといふのは、私共の渴望の的であった。特に民族心理学関係は、本邦に類書が乏しく、ノートの分量も浩瀚であつた。どのノートも極めて細字周密、絶えず訂正増補を加へられるので、満紙字で埋り、筆を加へる余地なしといふ有様であつた。一

つは私の勉強の為めに、一つは先生が例の如く、棄ててしまひはせぬかと懼つて、一時私が拜借してをつた。前橋に移られる時、是非まとめて頂きたい、刊行は何とか努力したいといふことで、ノート類をお返へしした。御著書も古本屋で探しては、お送りした。先生もその気になられ、旧稿の一部には相当筆を入れられ準備された。先生がなくなられてから、御宅でノート・遺稿を探したが、旧稿を訂正されたもの、秋の名古屋講義ノートの外は殆ど見つからなかつた。だんだん調べてみると、なくなれる少し前、不要なものは邪魔だと、御令孫の遊び道具に渡されたり、たきつけにしたりして、破毀されてしまつたといふことがわかつた。私共には何としてもあきらめきれぬ程残念であるが、先生としては当り前のことであつた。先生は過去や既に発表したものには何らの執着を持たれなかつた。先生のこのやり方は敢てまた故意にするという風ではなく、いかにも自然に受けとられる。先生は万事に恬澹であり、淡泊であり、水の低き

に流れるが如くであつた。

以上の理由でと故先生のせるにするわけではないが、先生の年譜を草するに当り、いざとなると、御経歴につき、正確な年月、その他わからぬことが多い。勿論先生は日記とか、履歴書とか、備忘録等は残されなかつた。書きもされなかつた様である。御履歴のことでは随分と書き洩したこと多いかと思ふ。また著作目録も同様である。特に雑誌論文については、私の記憶にありながら、今現物がなく不正確を避ける為め記さぬものもある。論文も相当落ちてゐる筈である。もう少し時間をかけ、よく調べて増補訂正するつもりである。単行本の場合は、重印は特記せず、ただ別の出版所より再版されたもののみを記した。お気づきの点を御教示願へれば幸である。講演や学会発表等は調査不十分の為め、省略した。併し先生の外面の生活は何らの波瀾もなく起伏もない。慶應義塾の教授として全生涯を終始一貫、教へて倦まずの一旬に尽きるであらう。

塾を退職されて後は、読書・散歩・詩作に自適された。

離京される時、藏書の大部分は塾の哲学研究室に譲られた。併し必要な本はかなり大垣に携へられた。併し前橋に移られる時、それも名古屋で処分された。先生の歿後に残った手沢本は書生時代から使はれたと思はれる中本薄葉の四書・五經と辞書数冊、漢詩作の参考書の詩韻含英等二、三冊、国訳漢文大成の杜甫・李白・東坡・陶淵明集等数部、国訳大藏經の法華經以下主要仏典数部にすぎなかつた。先生の御心境勞憊として迫るものがある。気が向けば、嘗て塾の図書館の書庫で読書された如く、前橋図書館に行かれた。一面学者にとつては煩惱の種とするなる書籍に対しても、大の読書家たる先生は執着をとどめられなかつた。

先生の御蔵書の事が出たから、ついでに附記しておきたい。塾の哲学研究室に入った御蔵書は殆ど全部洋書である。各冊巻頭に「無絃文庫」といふ方形の朱印が捺してあるから、すぐ識別できる。この蔵印は先生が捺され

たのではなく、塾に来てから先生の蔵書印をお借りして捺したのである。「無絃文庫」の蔵書印は先生の友人が随分昔わざ／＼篆刻して先生に贈られたとの由。併しかうしたことには至つて無精な先生は使用されたことはなかった。麗々しく藏印を捺す本もないよと笑つてをられた。事実先生の蔵書には所謂珍本稀本はない。先生は世に云ふ藏書家ではない。哲学関係書を当初から意識的に計画的に組織的に蒐集されたのではない。読まんが為に考へんが為に必要に応じて購入されたのである。先生は実によく塾図書館を利用された。座右必須書は別として、概ね図書館の架蔵本はそれを利用して、ないものを買はれた。先生の手沢本の全貌を察せんとするならば、図書館蔵本を併せ考へねばならぬ。

先生の蔵書は悉く読まれたる書である。一人の偉大なる思想家が生長していく過程を如実に示すコレクションである。茲に学者の蔵書として最も美事な最も立派な一典型を見出すであらう。先生の手沢本はいづれもが生命

形成の跡を示してゐる。心ある篤学者あらば、先生の手沢本と先生の著作とを対比して見給へ。眼あらば、その蔵書の機械的に非ざる、生命ながらの有機的体系に驚嘆し、哲学的思索の何たるかを自ら実地に体験するであらう。ヘーゲルの弁証法がやかましかつた頃、先生は語られた、敢へて弁証法の正反合ア・ウ・フ・ヘーベンと言ふならば、それは実は、種々の食料をとりながら、それを消化し摂取し、以て血肉と化して、全く新たな一個独自の生命体を形成して行く、その生命活動そのものではなからうかと。先生の御蔵書は、一学者が講学につれて自然と蓄積された儲蔵である。その各々相互は緊密な内的関聯を自から成しつつ、先生の人格ながら、全体として一個独自の生命体である。従つて全体として貴いのである。今、生命といふ言葉を使用した。

先生の行状はいかにも自然であり、作為がなかつた。巧むということは毫もなかつた。先生の天性はいかにもすなほで、俗に言へばウブそのものであられた。凡ゆる

ものを虚心に学びとられた。先生の学は博く、古今東西の哲学思想を深く読みこなされた。凡ゆる思想は先生の頭脳を濾過されると、その最も美しい善い精神のみが、先生の地味な虚飾のない、しかも平易明晰な文章となつて表現されて来る。故意に選択してさうされるのでなく、先生は一番善い所のみを自然に学びとられるのである。それは先生の深い性情、全人格に由来するものであらう。先生は私の軽躁の性を戒められる為でもあらうが、常に一貫操持して止まぬことの大切なことを話された。先生は實に教へて倦まず、学んで倦む色がなかつた。無倦怠、一貫して止まぬことは生命の自然の相そのものを現はす。先生の生命には彈力があつた。先生は名利を追はず、無欲恬淡であることは周知である。併しその様な單調平板な形容では尽し得ぬ自然さ、生命のしなやかさを持ってをられた。先生の博学、先生の好学、此は後人あやかゝて努めて止まなければ、企及し得よう。ただ先生の温潤の和氣玉の如き徳に至つては、後人の企及し

得ざる底、天の成せる所か、学のしからしむる所か、ただお人柄と贅嘆する外ない。

先生はただ講義ノート以外身辺何らの参考書もなく、西洋倫理思想史を書き下し、私に送つてよこされた。私の無力から未だ刊行の運びとならない。一昨年秋名古屋の女子短期大学長就任をくどき落され、（赴任しない条件で）昨秋十日程名古屋で連続講義をなされる予定であった。先生はそれをたのしみに待たれた。お便りにもそれをお洩された。題目を倫理と選定し、その準備のノートを作成するが、今の女学生の程度はどの位かといふお問い合わせもあつた。後で奥様に伺ふと、名古屋行を子供のやうに期待され、ノートの作成に倒れられるまでいそしまれたといふことである。そのノートは筆蹟些かも衰へぬ常と変らぬ細字で埋められ、十日分の講義どころではなく、もつと長く、併し未完で終られた。古今東西に亘る各国民の倫理的世界觀を概説比較批評しながら、恩の思想を中心とする我が倫理思想の発展を述べ、倫理とは

何か、道徳とは何かの大問題を真正面から説かうとされたのである。今は故先生の最晩年をしのぶ遺稿には先生の熱情がこめられてあつた。先生が名古屋行きを期待されたのは、一は再び故郷の地を踏む喜びに燃えてをられた。偶然残つた最近の俳句を書き留められた中には、故郷をなつかしみ先考をしのぶ句が列ねてあつた。もう一つは久しぶりで講義をするといふことそのものが楽しかったのである。併し、それ以上に先生には已むに已まらず訴へたい何ものかを抱いてをられたのではなからうか。客観的には名古屋の講義は、已むに已まれぬものを吐露せしめ、書き留めしむる切っかけを与へたのではなからうか。

先生の著作目録を一覧すれば、直に気づく如く、先生は御専門の哲学以外は書かれなかつた。それも空虚な理論を弄するものは一つもない。人生を如何に生きるか、人生の価値と意義を自覚して実践を深めようとする人生觀を取り扱はれた。また、この見地から教育問題は先生

の関心の焦点であつた。」の実践哲学と広義の教育問題、国民思想の動向、文明批評である。即ち言々句々眞の倫理の問題である。

先生はよく私に恩師ヴァント教授の晩年を語られた。ヴァントは第一次世界大戦の敗戦の後、世界の文化史上に於けるドイツ理想主義哲学の意義と使命を高唱した。最後の著作である自伝 “Erlebtes und Erkantess” の後半は諸民族の倫理思想を批判しながら、ドイツ理想主義哲学の歴史文化史上の使命を力説し、かの膨大な民族心理学十巻の巨著も目的と本旨はこゝにありとまで論じてゐる。同著の最後の結論の箇所を少しく訂正加筆したベンヘンバーグが “Die Weltkatastrophe und die deutsche Philosophie” (世界の破滅と独逸哲学) の題名で同じ一九二〇年刊行された。そのはしがきにM・ヴァント曰く、本稿は父の死即ち一九二〇年八月卅一日の数日前私に渡されしもの、父の絶筆なりと。

先生は前橋にあって、「倫理的世界觀の変遷」を稿す

るに際し、身辺何の参考書なく前言したのは言葉の縫に走りすぎた。ただ一冊使はれた。私にヴァントの倫理学三巻のうちの巻一即ち「倫理的世界觀の發展」の部分を送れと言って来られ、早速お送りした。終戦後間もなく御郷里の疎開地にお伺ひした時、散歩のお供をして、国道筋まで出た。先生は立ち止まって例の童顔をほころばせながら、子供の時西南戦争に行く官軍の行進をこの道端で見てゐたら、兵隊から坊や坊やと頭をなだられたと言はれた。そしてそこで引き返し、歩きながら「明治、大正、昭和！」といふやがれた。先生は奇しくもヴァント同様祖国の勃興期に呱呱の声をあげ、長寿を保ち、晩年に敗戦の悲運に際遇した思想家となつた。こゝやかな微笑をたたへ、杖をひき静に小路を逍遙し、或は半ば瞑想にふけるが如く田を細めて縁側に日なたぼっこを樂み、時に反故紙に筆を走らせては七言絶句に懷ひを託し、黙して語らず世に忘れられた悠々自適の一老翁の隠居生活、併し内なる精神生活の澄潭は湛々然とし、潭より回

る水は清冽にして、その切り落つる流れは湍渦をなして
をられた。忘れんとして忘れられず、常に脳裏を去ら
ず、胸奥を往来する関心事は終生ただ一点にあつた。各
国民の倫理的世界觀の変遷と、その中に立つ我が日本民
族の倫理感たる恩の思想の意義と自覺の宣言、これが文
字通り先生の絶筆であつた。先生は八十五年の全生涯を
哲学者としての責務を首尾一貫された。先生は眞の思想
家であり、学者であった。（昭和卅一年一月）